

「家族（仮）-前編-」

—二稿—

2025/9/23
脚本 太郎

人物表

衣川	サトシ	(13)	中学一年生
荒屋	ヒトミ	(12)	長女。小学六年生
荒屋	ヒトシ	(7)	ヒトミの弟。小学一年生
衣川	孝志	(37)	サトシの父
荒屋	千代	(34)	ヒトミとヒトシの母。孝志の恋人

1. 山道（夕）

半端に舗装された狭い道。両側が林のようになつて
いる。

走行中の一台の乗用車。

孝志の声 「じゃあ何、俺が悪いの？」

2. 車内（夕）

現実の車の走行音とゲーム内の車の機械的な走行音
が重なつて聞こえている。

運転席で運転している衣川孝志（37）と助手席に
座る荒屋千代（34）、激しく口論している。千代
は手に印刷した紙の地図をくしゃくしゃにして持つ
ている。

後部座席に座るのは右から、荒屋ヒトミ（12）、
荒屋ヒトシ（7）、衣川サトシ（13）の三人。ヒ
トミとヒトシの二人は強張った様子で身を寄せ合つ
ており、サトシはつまらなそうな様子で手元の古び
た携帯ゲーム（開閉式になっている）に興じている。
画面から、サトシがプレイしているのは山道を車で
走るレーシングゲームであることが分かる。障害物
である木やリアルな熊のキャラクターを避けながら
他の車と競走している。

千代 「だからさつきの道左じやないのって言つたのよわたし。
何でいつつも重要な時に限つて頑なにわたしの言うこと
スルーするわけ？」

千代、丸めた紙の地図をもう片方の手で叩いて抗議。
孝志 「知らねえよ。お前が言うの遅いんだろ」

千代 「アンタの反応が遅いんでしょうが。それとも何？」 まさ

か右と左も分かんないの？」

孝志 「うるせえな……大体右だの左だの言われても俺から見て
なのがお前から見てなのかも分かんねえんだよ」

千代 「同じ方向向いてんのに『どっちから見て』もないでしょ
馬鹿じやないの？」

千代、信じがたいといった顔でダッシュボードを叩

く。

孝志、渋い顔。

「えいやあ何、俺が悪いの？」

「さつきからそう言つてんでしょうが！」

千代、膝で助手席のグローブボックスを思いきり蹴る。

ヒトシ、ビクッと肩を揺らす。ヒトミは身を竦める。ヒトミが安心させるように、ヒトシの手を握る。

サトシは変わらず携帯ゲームを続いている。

「そもそもこの時代に紙の地図見ながら運転って何、レトロ趣味？ 遠出する前の段階でカーナビ直しといてつてわたし何回——」

孝志「だーもううつせえなあ！」

孝志、拳をホーンパッドに叩き付ける。クラクションが数秒鳴り続く。

孝志「俺の車なんだからいちいち文句言うな寄生虫が！」

孝志がアクセルを踏み込み、車のスピードが上がっていく。

ヒトミとヒトシ、ハラハラした様子で前方を見ている。

やがて車のスピードが戻っていく。

孝志と千代の言い合いは続いている。

ゲーム画面では、サトシの操作する車が前を走る車に追突して大破。『GAME OVER』の表示。

サトシ、小さく舌打ち。

ヒトミ、呆れた様子でサトシを見る。

二人の目が合う。

サトシ「（小声で）何だよ？」

ヒトミ「（小声で）別に。ただ香氣な兄貴候補だなーって」

サトシ「（小声で）放つとけ」

サトシ、視線を前に向けて、

サトシ「（小声で）どうせ兄妹になる見込みも薄いんだ」

ヒトミ、嫌そうな目でサトシの視線を追う。

向かつて左側は同じく林のようになつており、向かつて右側には小さな湖がある。

走行中の一台の乗用車。

ヒトミの声 「（小声で）確かに」

車のエンジンから異音がし始める。

サトシの声 「（小声で）第一あんな母親ごめんだ」「ヒトミの声 「（小声で）同感。そつちの父親もね」「

× × ×

山道の端に乗用車が停車している。

孝志、エンジンルームを開け、苛ついた様子で作業している。

千代は助手席でスマホを操作。

サトシ、ヒトミ、ヒトシの三人は先ほどと同じように後部座席で座っている。

千代 「ねえまだ直んじゃないの？」

孝志 「うるつせえな、素人にそんな簡単にどうにかできるかよ。J A Fが存在しない世界線から来たのかてめえは」

千代 「どうすんのよスマホも圈外でこんな山ン中で身動き取れなくてさあ」

千代、辺りを見回しながら、

千代 「熊とかさあ、出てくるかもよ？ 襲われたらどうすんの？ ヤバいよ？ ねえ聞いてる？」

ダッシュボードをバンバンバンバンと執拗に叩く。

孝志 「うるつせえうるせえうるせえうるせえ……分かつてんだよそんなこと……焦らすなよマジで」

孝志の奥歯がギリギリと鳴る。

数秒沈黙。

孝志の汗がエンジンルームに滴る。

孝志、舌打ちと溜息。

孝志 「うういうの全部俺だよ……」ういう面倒なのぜんつぶ俺がやらされてるよ……」

孝志が額の汗をぬぐう。

後部座席を睨む。

孝志 「後ろのガキ共も良いご身分だよなあ、座つてるだけでよ」

ヒトミとヒトシ、肩を震わせる。サトシは無反応。

ヒトミ、僅かに葛藤した末、恐る恐る、

ヒトミ 「あの、何か手伝——」

孝志 「聞いてんのか、マザコン野郎」

ヒトミ 「え?」

サトシ、孝志を睨む。

孝志 「あの女の言うことには二つ返事で尻尾振つてたくせに、俺の言うことには聞く耳も持たねえってか?」

千代 「うるつさいわねきつきから。口じゃなくて手動かしなき

いよ」

千代、ダッシュボードを叩いて。

孝志、千代を睨みつける。歯を食いしばる。

く。

「ふざけんなよこつちの台詞だよ。やつてんだろ? ...

ほんとにふざけなんだよ。バスのくせに何様なんだよ。

ゴリラみたいな顔しやがつて」

千代、それを聞いて、耐え兼ねたように髪を搔きむ
しつて、

千代 「あーもうマジで無理、限界。別れよ」

千代、スマホを放り投げるようダッシュボードに

置く。

孝志、信じられないという様子で千代を見る。

「はあ?」

千代 「帰つたらすぐ荷物まとめて出てつてね」

孝志、しばらくわなわなと震え、

孝志 「じゃあもう直さねえよ、んなモン」

車を思いきり蹴る。車体が大きく揺れる。

千代、ヒトミ、ヒトシの三人が驚いて身体を跳ねさせ
る。サトシはゲームを再開している。

孝志

「何なんだよさつきからその態度は、おかしいだろ。てめ

えは面倒なこと全部俺にやらせてるくせによ」

孝志、車を回り込んで助手席のドアまで歩いていく。

千代、身を強張らせる。

孝志、乱暴にドアを開ける。

「え、ちょっと……」

「文句あるなら後全部てめえでやつてみろよ」

孝志、千代を滅茶苦茶に殴りまくる。

孝志
「（殴打に合わせて）死ねつ、死ねつ、死ねつ。お前なんか、熊に食われて、死んじまえつ」

ヒトミとヒトシ、身を寄せ合っている。ヒトミはヒトシの手を握っている。サトシは変わらずゲームをしている。

× × ×

千代、鼻血を垂らしてダッショボードに頃垂れ、泣いている。

孝志は息を切らせ、車から遠ざかっていく。

孝志
「ちょっとクソしてくるから、俺戻ってくるまでに直しつけよ。できるもんならな」

4. 車内（夕）

千代の嗚咽だけが車内に聞こえている。

彼女はダッショボードに頃垂れて泣いたまま、顔を上げない。時折姿勢は変えずに、助手席と運転席の間の収納スペースに置いてあるボックスティッシュからティッシュを取り、鼻をかんだり涙を拭つたりしている。

沈黙。

やがてヒトシ、不安そうな様子で、

ヒトシ 「……おかあさん？」

ヒトミの顔が引き攣る。

直後に千代、奇声を上げて思いきり髪を搔きむしる。

ヒトミとヒトシ、驚いて仰け反る。

サトシは顔を上げて眉を顰める。

千代の引っこ抜かれた髪が幾つか落ちる。

千代、ボックスステイツシユからティツシユを一気に何枚も乱暴に取り、豪快に鼻をかむ。

使用済みティツシユを投げ捨てる。

開いたままの助手席のドアから出していく。

ヒトミ、まずい、という顔。何かを察した様子で、ヒトシをかばうように彼に覆いかぶさる。

サトシは辟易したような顔。

千代が外からヒトミが座っている方の後部座席のドアに近付く。

ドアを思いきり開ける。

ヒトミとヒトシの二人は目をグッと瞑っている。

千代がヒトミを滅茶苦茶に殴りまくる。

サトシがそれを不快そうな表情で見ていく。

ゲーム画面では、操作を失ったサトシの車がコースアウトする。

千代、しばらく殴り続けると、やがてえずき声をあげ、口元を押さえる。

ゲーム画面では、サトシの車が熊のキャラクターに当たつて大破。熊に引っかかれ、四本の爪の軌跡の線が走る。そして『GAME OVER』の表示。

さらに千代のえずき声。

千代が駆け出す。

サトシは小さく溜め息を吐くと、退屈そうな表情に戻り、ゲームを再開。

『GAME OVER』の表示を見て舌打ち。

5. 山道(夕)

千代、車から離れ、湖の方へ走っていく。

走っている途中で嘔吐し、その場でうずくまる。再び泣き始める。

6. 車内(夕)

ヒトミ、服と髪が乱れており、鼻血を流している。ヒトシがヒトミにしがみついて泣いている。ヒトミ

は苦痛に耐える表情でヒトシの頭を撫でている。

ヒトミの息は僅かに荒い。

サトシ、変わらずゲームをしている。

やがて携帯ゲーム機から目を離し、呆れた様子でヒトシを見る。

サトシ「何で殴られてない方が泣いてんだよ」

ヒトミ、サトシを睨みつける。

ヒトミ「何その言い草」

サトシ「いや余計なお世話だつたか」

ヒトミ「かばうそぶりも見せない兄貴候補に何も言う資格なし。

……いや、そういうやさつき兄妹にならないこと確定したんだつたつけ？」

サトシ「……そうだつたな」

サトシ、ゲームを再開。

ヒトミが苦痛に耐える表情でヒトシを抱き締める。

サトシ、横目でチラツとヒトミたちを見て、すぐ思い直したようにゲームに視線を戻す。

サトシ「やることが多くて忙しそうだな、と思つただけ」

ヒトミ「お姉ちゃんだからね。こればっかりは」

サトシ「ふーん。大変だな」

ヒトミ「大変よ。そつちはやることがなくて暇？」

サトシ「まあ。なきやないで気楽でいいけど」

携帯ゲームの画面ではサトシの操作する車がコースアウトし、他の複数台の車に抜かれる。

サトシ、僅かに顔を顰める。

ヒトミの息の荒さが少し増す。

ヒトミ「あつそ、物は言いようね」

ヒトミがヒトシを抱き締める力が増す。ヒトシの背中にはヒトミの鼻血がポタポタと滴っている。

サトシ、衣擦れの音にゲームの手を止め、ヒトシの背中に垂れた鼻血に視線が向く。少し眉を寄せる。やがてヒトミの鼻血と前方の収納スペースにあるボックスティッシュを見比べる。

ヒトミ、僅かに言葉を探すような間。

サトシ、ティッシュに視線が固定。

ヒトミ「でも、そんなに暇でお気楽なうや」

ヒトミが鼻をする。

ヒトミ「どうせ最後なんだし、今から家までの片道分くらい、わたしのお兄ちゃんでいてくれない？」

サトシ、驚いた様子でヒトミを見る。

ヒトミは涙目で泣くのを堪えている。どこか縮るような表情。

サトシ、ぎょっとした表情。

ヒトミ「ダメかな？」

サトシ、困惑で何も言えない。

すると徐々にヒトミの表情が憎悪に変わっていく。

サトシ、ハツとすると、咄嗟に表情を取り繕い、ヒトミから携帯ゲーム機に視線を逸らす。

サトシ「何だよ今更」

ヒトミ、失望の顔。

直後に表情を和らげると涙を拭って、苦笑。鼻血は流れっぱなし。

ヒトミ「ま、無事に帰れるかも分かんないけどさ」

サトシ、動搖をさまかすように、

サトシ「下らねえ」

と吐き捨て、携帯ゲームを再開する。

続く